

太陽がくれた季節（前篇）

校 長 武井 正明

【19 日 見附球場→柏崎陸上競技場】

見附球場は朝から文字通り、灼熱の太陽だ。全く日陰のないスタンドでは、ものすごい太鼓と応援の音が響き渡る。

吉中ナインは完全に復調していた。相手のスキを突いた背番号4の巧走星が3点を呼んだ。エースの彼は6回を完全に抑え込んだ。最終回こそ初ヒットを許したが、星稜戦から一皮むけた、安定感ある投球で完封3－0での完勝だった。

よし、今度は柏崎、陸上だ。競技場は海のすぐそば。時々爽やかな海風が吹く。

今日は通信で観られなかった男女のリレーを観たい。女子はそこで痛恨のバトンミスをして繋げなかった。今回はタイムよりも、男女ともにバトンパスをミスなくしっかり繋いで走り抜く雄姿を観たい。

女子はしっかり繋いだ。男子も目標の44秒台に迫る走りだった。よく頑張った。

帰り際、偶然女子のメンバー4人と逢う。決勝進出にあと一步の9位の悔しさとベストタイムを更新した達成感が入り混じり、その思いは涙になって溢れる。全力を尽くして泣けるって、いいな。本当にお疲れさまでした。柏崎まで来た甲斐がありました。

【20 日新潟テルサ】

朝、埼玉へ向かうバスの中。カラーガード部の笑顔が佐々木先生から送られてくる。今回は行けないけれど、みんな、頑張れよ。心の中で祈る。

今日は下越地区吹奏楽コンクール。吉中赴任初日に締めたワインレッドのネクタイと、校長になる時、恩人からいただいたタイピンで気持ちを引き締めて家を出る。「蒼い三日月の夜」…20回は聴いた。曲の展開は頭に叩き込んで臨む。

吉中は7番目。先頭の新津五中から次々と素晴らしい演奏が披露される。皆がこの一瞬に賭けてくるのだ。その思いがステージに響き渡る。

ドキドキで迎えた吉中の演奏。静寂の中に響く、横笛の細長い音色に、蒼空に映る三日月が浮かぶ。激しく叩く鼓動の向こうに、本陣の松明と、雄叫びを上げる独眼竜政宗が見える。壮大な終盤、二度目のシンバルの響きに涙が込み上げる。矢澤先生の指揮が、突き刺すような右腕が、曲を引っ張る。

聴き終わった瞬間、音楽ではなく伊達政宗の生涯という物語を観終えたように錯覚した。魂が震える、素晴らしい演奏だった。これを9月の芸文で、もう一度、聴きたい!!

その直後、野球部が1－0で辛勝し、準決勝に駒を進めたと朗報が入る。よしっ!!

そして夕方、吹部金!!代表の待ちに待った報せが、明道先生から届く。よっしゃ!!

ガードは銀賞。目標には届かなかったが、大きなミスもなく、演技後に「楽しかったね」と言って終わられることの尊さを讃えたい。佐々木先生のメッセージの向こうに、車中での彼女たちの笑顔が浮かぶ。本当にお疲れ様。みんなよく頑張った!!（後編に続く）